

宋元文化の移植と禪宗

大屋徳城

禪宗が宋元の兩朝に隆盛を極むると共に、本邦に傳來し、彼地の高僧の來化するもの多く、又彼地に遊ぶ本邦の禪僧も少からず、随つて、宗旨は勿論、宋元の文化のいろいろを將來し、以て本邦文化の刷新に資したことは多大である。斯る文化の中には、宋儒の學を始めとして、文學あり、藝術あり、風俗あり、習慣あり、其數枚舉に遑がない程であるが、就中、印刷方面に於いて、一種特別な文化を移植した。即ち鎌倉から室町にかけて、本邦叢林の間に盛行した五山板がこれである。

本邦の印刷文化は初め京洛に起り、後寧樂と高野に榮え、藤原時代から鎌倉にかけて盛んであり寧樂では春日板と稱して、興福寺を中心として、唯識論關係の經論を出板し、高野では眞言を中心とした經論を出板したが、一先づ應永頃を以て衰頽に向つて居る。然るに、五山板は鎌倉の中葉から始つて、吉野朝を通じ、室町の末まで引續いて随分盛んである。されば、五山板は寧樂、高野よりは少し後れたけれど、寧樂、高野よりは後まで引續いて盛んである。而して、寧樂や高野の印刷が傳統的の系統を受けた寫經風の和様なるに比し、其書風も、板式も、裝潢も純然たる支那風であ

る點が注意さるる。即ち宋元の風に則り、宋元の印刷文化を移植したのである。

五山板の特色は版式が宋元の風を移した點に存することは疑ひない事實であるが、斯る外形の形式だけでなく、實は内容に於いても亦特異のものを存するのである。即ち寧樂や高野の印刷開板はいろいろのものがあるとしても、經論といふ範圍に立籠つて、いはゆる内典の外には少しも出て居ないのである。即ち佛書ばかりで、和書も漢籍も無い。即ち外典といふものは一冊も無いのである。然るに、五山板は佛書は經論から註疏や語錄に及び、其範圍が廣いのみで無く、儒書や詩文のやうな外典に及んで居る。此點が我が印刷史上に於いて、前代に未だ見ざる盛觀である。今鎌倉中葉以後の禪籍の出版を大觀すれば、左の如くである。

弘 安

六年 傳 心 法 要 七年 大休正念語錄

十年 禪 門 寶 訓 十年 傳 法 正 宗 記

正 應

元年 應 庵 語 錄 元年 密 庵 語 錄

永 仁

三年 禪 林 僧 寶 傳

乾元	二年	人天眼目
嘉元	元年	虛堂語錄
德治	二年	聚分韻略
正和	二年	虛堂後錄並新添
元應	二年	臨濟錄
正中	元年	傳法正宗記
嘉曆	三年	圓悟心要
元德	四年	臨濟錄
	二年	寒山詩

宋元文化の移植と禪宗

(三)

三年 大應錄

元弘

元年 來來禪子集

建武

元年 蘭溪禪師語錄

曆應

二年 大惠普說

四年 圓悟心要

康永

元年 古林和尚語錄

四年 古林偈頌拾遺

貞和

二年 雲臥紀談

五年 雪峯空外集

五年 東山內集

二年 首楞嚴義疏注經

四年 雲源筆語

三年 夢中間答

四年 景德傳燈錄

五年 五家正宗贊

觀應

二年 輔教篇

文和

三年 夢窓國師語錄

五年 百丈清規

延文

二年 義雲和尚語錄

三年 景德傳燈錄

四年 黃龍十世錄

四年 蒲室集

四年 叢林公論

四年 詩法源流

六年 范德機詩集

康安

元年 宗門十規論

貞治

二年 月林和尚語錄

三年 五燈會元

三年 元亨釋書

六年 黃龍書釋

六年 禪林類聚

七年 空華集

宋元文化の移植と禪宗

(五)

應安
七年 五燈會元
七年 虎丘語錄

元年 南堂和尚語錄
元年 了庵語錄

三年 四大老錄
三年 破菴語錄

三年 應菴語錄
三年 月江語錄

三年 無準和尚語錄
三年 光元禪師語錄

四年 宗鏡錄
五年 碧山堂集

五年 大應國師語錄
六年 寧禪師語錄

七年 蒙求

永和

二年 歷代帝王編年互見之圖
二年 杜工部詩

三年 元亨釋書
三年 寂室語錄

四年 大休和尚語錄

康曆

二年 黃龍十世錄
二年 林間錄

永 德

二年 佛祖宗派圖 四年 傳法正宗記

至 德

元年 元亨釋書 元年 傳法正宗記

元年 佛德錄 二年 八方珠玉集

四年 柳宗元文集 四年 達磨三論

嘉 慶

元年 冥樞會要 元年 唐柳先生文集

二年 貞和聯芳集 二年 首楞嚴經會解

明 德

二年 月庵語錄 四年 新編排韻增廣事類氏族大全

以上、鎌倉の中葉から吉野朝の終までに就いて、槩本の現存するものを挙げたが、應永以後、永享、文明、延徳、明應に亘つても、續續出版されて居り、其他、無刊記のもので、刊年も、刊所も分らぬものが随分澤山ある。されば、五山板は足利の末まで、續いて居るのである。

さて、まづ内典に就いて、宋元の文化を移植した點を述べると、第一は彼地の禪宗の語録を出版

して、禪宗思想の普及を圖つたことである。就中、臨濟錄、碧巖錄の如きは、數度開板せられて、叢林の需要を充して居り、其外、彼地の禪僧の語録や、彼地から本邦に歸化した禪僧の語録を出版したことも、亦宋元禪宗文化の移植といはねばならぬ。

次に擧ぐべきは、傳法正宗記、禪林僧寶傳、五家正宗贊、景德傳燈錄、五燈會元等の如く、禪門の傳記や、語録の總集の如きものが開板されて居ることである。此等も亦禪門に於ける教科書として、大に愛讀されたことが察せらる。即ち啓蒙的讀物としての需要が少くなかつたであらう。之に對し、虎關の元亨釋書が本邦禪林の撰述として屢開版されて居ることは、よく這裡の消息を傳ふるものといはねばならぬ。

以上の内典に對し、詩文、儒書の如き外典が出版されて居る。外典の出版は五山板の特色であり其數も亦内典に對して決して少く無い。而して、其大部分は宋元板の覆刻であつて、これこそは其板式といふ方面から見ても、本統に宋元印刷文化の移植である。且つ當時の叢林には宋儒の學が行はれると共に、詩文が流行したから、需要も少くなかつたであらうし、隨つて、彼地からの舶載の書を獲得することは甚だ難かつたであらうと思はれるから、かういふ點に於いても、手近い所で覆刻されるといふことは、彼地の文化を學ぶ上に、極めて必要なことであつたのである。而して、彼地から出版に従事する専門の刻工の渡來まであつたことは、此間の事情を十分に語るものである。

叢林に於ける外典出版の初めに就いては、いろいろ議論の存する所であるが、現存せるものに就いていへば、正中二年の寒山詩一卷である。こは禪尼宗澤捨心といふ人が刻する所であるが、何寺の開板であるかは明かでない。寒山詩は叢林に愛讀される詩集であるから、禪宗寺院に於ける開板たることは疑ひあるまい。

寒山詩に次いで、春屋妙葩の開板した延文四年の詩法源流一卷と、同六年の范徳機詩集七卷がある。妙葩は即ち普明國師で、相國寺の開山であり、夢窓國師の弟子で、多くの禪書を開板した關係上、餘力を以て、斯る詩文の方面にも及んだであらう。詩法源流は元楊載の撰であり、范徳機詩集は元范梈の詩集である。當時叢林は妙葩同門の義堂や絶海の時代で、詩文の盛んであつた時代で、五山文學の大に興らんとした時代であるから、斯様な彼地の詩文が要求されたのであらう。

此頃元人の愈良甫なる者が渡來して、多くの書籍を開板して居る。即ち應安三年の月江和尚語録二卷、同四年の宗鏡錄一百卷、同五年の碧山堂集五卷、永和二年の集千家註分類杜工部詩二十五卷至徳元年の傳法正宗記二十卷、嘉慶元年の新刊五百家註音辯唐柳先生文集四十五卷、應永二年の般若心經疏一卷は明に出版年月の分つて居るものであり、其他、刊年不明のものに、白雲集四卷、王狀元集百家註分類東坡先生詩二十五卷、無量壽禪師日用清規一卷、佛祖歴代通載二十一卷がある。斯様に愈良甫は内外典に亘つて、前代に類の無い多くの書籍を開板して居るが、就中、杜詩、韓文

柳文、東坡詩の如き、彼地の大家の而も卷數の多いものを續續開板したことは、叢林に於ける詩文の流行を促進するに多大の益があつたと共に、宋元の趣味や好尚を傳播するに、大なる貢獻があつたと思はれる。而して、彼の事業もやはり叢林に依存して行はれた點を考へると、これ亦禪宗の功績といはねばなるまい。

兪良甫と前後して來朝した刻工に陳孟榮がある。此人は兪良甫のやうに獨立して開板したかどうかは明かでないが、刊年の明かでない天童平石和尚語錄二卷には、孟榮刊行の文字があるから、若干は自營したかも知れぬ。併し多くは寺院の開板に従事し、又兪良甫と共同して開板したのもある。其與つたものには、應安七年の重新點校附音増註蒙求三卷、刊年未詳の大廣益會玉篇三十卷がある。

其他、無刊記の本で、隨つて、いつ開板されたか、開板の年月も、開板の場所も分らず、來歴の明かでないもので、叢林の間に開板され、又は禪徒の手に依つて開板されたであらうと思はれるものは少くないが、其中の主なるものを擧ぐれば、尙書孔氏傳十三卷、毛詩鄭箋二十卷、春秋經傳集解三十卷、音注孟子十四卷、新板大字附音釋文千字文註一卷、增修互註禮部韻略五卷、歷代帝王紹運圖一卷、唐才子傳十卷、冷齋夜話十卷、韻府群玉二十卷、分類合璧圖像句解君臣故事二卷、莊子虜齋口義十卷、列子虜齋口義二卷、山谷黃先生大全詩註二十卷、趙子昂詩集三卷、揭曼碩詩集三卷

雪廬叢一卷、江湖風月全集一卷、唐朝四賢精詩四卷、精選唐宋千家聯珠詩格二十卷、魁本大字諸儒箋解古文真寶前集十卷、後集十卷、皇元風雅前集六卷、後集六卷、詩人玉屑二十卷等がある。

上述の如く、内典、外典に亘つて、鎌倉から吉野朝を通じ、足利氏の執政時代を通じて、禪林に於いて開板され、又は禪徒の手に依つて開板されたものは、夥しい數に上り、殊に内典の無刊記類を入れるならば、其數は愈増加するであらう。而して、此等開板の原本と爲つたものは、恐らくは悉く我が入宋、入元の禪僧の手に依つて請來され、輸入されたものに相違あるまい。たとへ、其開板に關して、兪良甫の如き、半ば獨立して經營した刻工も無いことは無かつたとしても、此等の刻工と雖も、全く叢林の背景を離れては、策の施すべきものがなかつたであらう。されば、此等すべての開板は禪宗叢林の行ふ所といつても、決して過言ではないのである。

他宗の開板が狭くは其宗、廣くも佛教といふ範圍に止り、内典に限られたに對し、又彼等の開板の中にも、若干の宋や元で開板した經典の覆刻があつたとしても、それは極めて少數であり、宋元文化の移植などとはいへぬ程度のものであるに對し、五山板の範圍が極めて廣く、内典禪錄はいふに及ばず、遍く外典に及んだといふことは、禪宗が不立文字を標榜すると共に、宗我の見に乏しく極めて自由に儒書詩文を選ばず、あらゆる思想の産物を網羅したことは、一方からいへば、縉流の儒者を養成した嫌ひがないでもないが、廣く文化といふ方面から考ゆると、確に宋元の一般的文化、

特に思想や趣味を移植するに役立つこと多大であるといはねばならぬ。當時でいへば、斯等の書籍は思想や趣味の最尖端を行くものであり、我が傳統的文化の上に、清新の氣分を注入したものといはねばならぬ。されば、狭くは印刷開板の上に、廣くは室町時代を中心とする我が特殊の文化の上に、五山板の有つ意義は決して輕視すべきものではあるまい。

(昭和十五年十月稿)